



精神病理学私記

H・S・サリヴァン 著，
阿部大樹，須貝秀平 訳
日本評論社
2019年10月 400頁
本体価格 5,500円＋税

本書は、アメリカの伝説的な精神科医、Sullivan, H. S. が生前唯一完成させた——しかし、本国で出版されたのは、その死後20年以上経た1972年——著書、『Personal Psychology』の待望の邦訳である。「待望の」というのは、1970年代よりわが国にSullivanの業績を広く紹介してきた中井久夫らも翻訳に着手したまま、ついに完了しなかったといういわくつきの著書であるからだ。実に原著が完成した90年後に邦訳として陽の目を見た本書は、その謎めいた経緯もあいまって、妖しい魅力に満ちている。

まず、本書は、2020年に第6回日本翻訳大賞を受賞したことが示すように、なにより訳文が瑞々しく、読む者の胸にすっと入ってくる。例えば、原著の第1章冒頭の記述を本書のそれとくらべてみよう。

It has become conventional to regard “the mind” as a dubious field for investigation. Devotion either to an outworn materialistic tradition or to an even older and more threadbare spiritualistic metaphysics has eventuated in two groups of crudities in this field. Thus there are more or less competent “natural” scientists without number who react to “the mental” as to something necessarily erroneous. And there are sad folk far more utterly without number who demand of “the mental” nothing short of the truly miraculous. (原著, W. W. Norton & Company, 1984)

こころの研究。今やすっかり、覚束ない言葉になってしまった。自然科学者の多くは時代遅れの唯物論を着込み、かたや民衆は擦り切れた唯心論を身にまとうだけで

ある。一方はこころなんて脳の誤作動だと強弁し、もう一方では美しい奇跡の産物だと勘違いしている。(本書)

かように難解・晦渋で知られるSullivanの原文を、その手の込んだレトリックの気配を残しながらも、小気味よいテンポの文章へ訳出している。その創意と度胸のよさに感心させられた。原著が書かれた時代の精神医学の状況や社会背景を伝える多くの訳注も詳細、かつ周到である。本書によって初めてSullivanに触れる読者には、巻頭のPerry女史——Sullivanの晩年のアシスタントを務めた社会心理学者——による「イントロダクション」と巻末の「訳者あとがき」、および「サリヴァン小史」から読み始めることを勧めたい。

ただ、読みやすい訳文とはいえ、本書によってSullivanの精神医学が明快になったわけではない。本書の記述には、すでに邦訳された『分裂病は人間的過程である』『精神医学は対人関係論である』『精神医学的面接』（いずれもみずす書房）などの後年の論文や講義の内容と重複する部分が少ないが、さらにSullivanのこころの奥の底知れない深い闇を見た気がする。とくに児童期における「昇華」や「批難の転嫁」と呼ぶ防衛の危うさ、前青春期のチャムやギャングにおける同性愛的性衝動と疎外された少年の孤独、そして男性青春期のトラウマ的な性体験などの描写は、異様に生々しく迫ってくる。というのも、訳者によれば、本書の記述には、Sullivan自身の「生活歴が折り畳まれるように潜り込んでいる」のであり、中井もほとんど自伝としてよいほどのものが内容の3分の1を占めるという指摘に言及している。原著が長らく封印された理由には、その点が絡んでいるらしい。それゆえ、原著のタイトルにある“Personal”とは、「Sullivan個人の」の意味が隠されると伝聞されており、邦題を「私記」としたのは正しい。

しかしながら、本書は決してSullivan個人の病跡学の教材にとどまるものではないだろう。彼がスキゾフレニアとして記述する症例に酷いトラウマ体験を負う者がなんと多いことか。本書は、「神の名のもとに」社会や文化に押し潰された個々人の精神発達に見られるおおよそ普遍的な病理を告発しているのである。COVID-19に翻弄され、同調圧力と不寛容さを強める現在の世界において、本書は予言書のようにさえ思えてくる。(黒木俊秀)